

近代韓国における西洋哲学の受容と展開

金 鍾 旭

一 序 言

一九世紀後半、東アジアは、西欧により強要された近代化により衝撃と混乱の時代を迎えた。近代化を受け取る速度によって、東アジアの国々は、自らが加害者となることもあり、被害者となることもあるという不幸な歴史を演出した。しかし、わずか一〇〇年にも満たない期間に、鎖国と開化、植民と解放、戦争と分断をすべて経験した韓国ほど、悲劇的かつダイナミックな時代を生きてきた国もないであろう。このような悲劇の時代を克服するためには、西洋を知り西洋の文明と哲学とを学び、それを追いかけて捕まえようと試みるしかなかった。したがってこのような強要された能動性を背景とするために、韓国における西洋哲学の受容は単純な知的好奇心ではなく、切迫した時代的状況の要求にしたがうものであるといえる。本論文で

は、このように受容された西洋哲学が韓国で展開される約一五〇年の歴史を六つの時期に分けて説明し、最後にこのような展開過程に盛り込まれた韓国哲学の特徴を三つに分けて記述する。

二 「伝来の時期」(一八七〇—一九四五)

1 儒学の視線での初対面(一八七〇—一九二二)

韓国における西洋哲学の受容時期は、朝鮮王朝末期の一九世紀末と見るのが通説である。しかし、西洋哲学に最初に触れた時を基準とするならば、これよりも遙か以前の一六三一年、鄭斗源^{トウウォン}が北京に出かけて『天学初函』をもたらした時に遡る。『天学初函』に掲載された「靈言蠡勺」は西洋宣教師の華方済(Francesco Sambiasi, 1582-1649)が口述したものを中国の徐光啓が記録したもので、天主学の立場で亜尼瑪(anima)、す

なわち靈魂に関して論じた一種の心理学書である。ここで華方濟は「亜尼瑪 (anima) の学」を「費祿蘇非亜 (philosophia)」と翻譯し、「格物窮理之学」と規定した⁽¹⁾。これが恐らく韓国の知識人が *philosophia* という言葉に初めて対面した契機となつたと思われる。その後、一七二四年、愼後聃^{シンプダム} (一七〇二—一七六一) は自身の『西学辯』において、この「靈言蠡勺」を研究し、天主教と西洋哲学とを儒学の立場から批判した。このように儒学の立場から西洋哲学を批判的に理解するのは、韓国における西洋哲学の伝来期の重要な特徴の一つである。Philosophia という用語に対する単純な対面から脱し、自分たちの主体的な観点から西洋哲学を受容した時、そのような観点の核心は儒学であった。もちろん、これは中体西用、東道西器、和魂洋才が時代精神として作用した一九世紀末の東アジア一般の情緒が、西洋哲学に対する儒学の対応として現れたものと見ることが出来る。このような儒学的対応の代表者として、李定稷^{イジンジク} (一八四一—一九一〇) と李寅梓^{イインジク} (一八七〇—一九二九) がいる。李定稷は、一八六八年から一年間、燕行使に随行し、北京で西洋の新学問を涉獵し、帰国後に三〇巻に達する『燕石山房稿』を著したが、その中には一八八頁の分量のカント哲学の関連論文である「康氏哲学説大略」が収録されている。当時、北京で李定稷がカント哲学と会ったのは、一八八六年に清の康有為^{イフエ}が『諸天講』で最初にカントに言及した時より一〇年余り先立つ⁽²⁾。韓国で最初に西洋哲学に関連する論文を著した人物が

李定稷であるならば、韓国で最初に西洋哲学に関連する著書を書いた人物は李寅梓である。彼もやはり西洋哲学を儒学の観点から理解している。生涯を主理論で一貫してきた儒学者であったが、李寅梓は西洋の力である新学問の源泉が哲学であり、西洋哲学が古代ギリシア哲学から始まることを悟ってギリシア哲学に没頭した後、一九一二年、ついに『古代ギリシア哲学攷辨』を著した。

2 西欧留学を通じた直接の受容 (一九一三—一九二九)

李定稷と李寅梓の作業は、自分たちの主体的な観点を堅持していたが、儒学の視線を固守したままで自らに与えられた西洋哲学を論評したものであったので、彼らにより西洋哲学の受容が本軌道に進出したということはできない。韓半島における西洋哲学の本格的な受容は、一九一〇年代と一九二〇年代を経て、新世代が西欧に直接留学に行くことによりなされた。ところでこのような現象は、朝鮮王朝の没落という暗鬱な政治的状況と関連が深い。まず一九一〇年代の海外留学は、日帝による韓日合邦直前の独立協会の活動に刺激をうけたところが大きい。一八八四年、甲申政変の失敗により米国に亡命し留学した徐載弼^{ソジョンピル}は、一八九五年に帰国した後、独立新聞を創刊し、独立協会を組織した。独立新聞を通して彼はルソーの啓蒙主義、ベンスラムの功利主義、モンテスキューの自然法思想などを普及し、法治主義と天賦人權説を強調した⁽³⁾。また皇城新聞の社長、張志淵^{イジンヨ}は社説などを通して、近代化された先進文物を共有す

るためには西洋哲学の研究を怠らないで行うことを願い、デカルト、カント、フイヒテ、シェリング、ヘーゲルなどの哲学を紹介することも行った。このような西欧の思想界の動向の紹介と西洋哲学の学習の勧誘は、若い知識人たちに直接、西欧への留学を決心させた。そして西洋哲学を学ぶために最初に海外留学に旅立つ者が出始めたが、それが金重世である。本来、仏教学徒であり梵語字典の編纂もしていた金重世は、一九〇九年からベルリン大学で古代ギリシア哲学を勉強した後、一九二三年、ライプツィヒ大学で博士学位を受けた。また李灌鏞は一九一二年から英国、フランス、ドイツを経て、一九二一年、スイスのチューリッヒ大学で博士学位を受けた。一九一七年に早稲田大学哲学科を卒業した崔斗善は、帰国後の一九二二年、再びドイツに留学し、マールブルク大学でハイデガーの弟子となった。

3 日本による哲学教育と制度樹立（一九三〇—一九四五）

すでに一九二〇年代に多数の日本留學生がいたが、一九二五年には崔鉉培が京都帝大哲学科を、一九二六年には蔡弼近と尹泰東が、一九二九年には金斗憲がそれぞれ東京帝大哲学科を卒業した。しかし、日本が韓国の哲学界に本格的に影響を及ぼすようになるのは、一九二六年、京城帝大の法文学部に哲学科を設置してからである。朝鮮人による民立大学設立の試みを雲散させ、植民地官吏の養成を目標として、朝鮮総督府は一九二四年に京城帝国大学を設立し、一九二六年に哲学科を設置した。

これにより、韓国に最初の大学教育機関設立と哲学科の設置が行われるようになり、韓半島に初めて体系的な西洋哲学の講義が多数、開設された。そして一九二九年、第一回の卒業生として金桂淑、権世元、趙容郁などを輩出し、次いで申南澈（第三回）、高亨坤、朴鍾鴻（以上、第五回）などが卒業した。彼らはその後、韓国で西洋哲学の学問的な樹立に大きな役割をし、特に朴鍾鴻と高亨坤は韓国哲学界の泰斗となった。京城帝大出身者たちは、その後、西洋哲学の関連の学術活動の中心となる。哲学科卒業生たちを始めとする京城帝大の各学科の卒業生たちは、一九二九年に『新興』という総合学術誌を創刊し本格的な学術活動を開始した。そして一九三三年、京城帝大の哲学科出身である高亨坤、朴鍾鴻、申南澈などは哲学研究会を結成し、韓国最初の哲学専門の学術誌である『哲学』を刊行した。『哲学』創刊号の最初の論文である朴鍾鴻の「哲学することの出发点に関する一疑問」において、彼は「我々の哲学する動機は、あまりにも暗鬱な現実的苦悩から始まる」と述べ、現実的な生の問題に根を置いた哲学を主張した。実際に『哲学』に掲載された論文の大多数が問題中心の哲学を指向した。しかし日帝の強圧統治は、問題を一般的で包括的な方式で扱うようにさせ、現実問題が直接的に争点化しないようにした。しかし、それさえも日帝の皇国臣民化政策により一九三六年、哲学研究会は解散させられ、『哲学』誌も廃刊に追い込まれた。

三 「整備の時期」(一九四六—一九五九)

一九四五年八月、韓国は日本帝国主義の統治から解放されたが、植民体制から分断体制へ変化しただけで、完全な統一国家の建国には至らなかつた。一九四八年、南韓と北韓は別個の政府を出版させることにより、分断体制が固着化されたが、一九三六年に朝鮮思想犯保護觀察令が公布されてから一〇年、一九四一年に朝鮮語学習禁止令が発表されてから五年ぶりに、ソウルでは思想と出版の自由を満喫できるようになった。解放初年、一〇余りの出版社から数十種の本が刊行されたのが、一九五〇年頃には八五〇の出版社から一七五〇種が出るほどであった。このような出版の活況は、哲学分野にも波及し、一九四五年から一九五〇年の間に二十余種の単行本が出版された。もちろん、これらの大部分は概論書であったが、一九四七年と一九四八年の間に論理学の本が四種も出版された。この中、李載薫の『論理学』はインド仏教の因明学と中国の名学など、東洋の論理まで併せる包括的な著述であった。そして、解放直後から始まったマルクス主義に対する活発な論議は、一九四八年一〇月、麗水順天での反乱事件により国会で国家保安法が通過する以前まで、左翼の理念の書籍を大量に流通させるようになった。このように左翼と右翼との対立は、思想と出版の自由を混乱の地境にまで追い込んだが、西洋哲学の教育と学習は、大学の体制の中で新たに整備される機会を迎えるようになった。一

九四八年、大韓民国政府の樹立とともに、社会の各部分の機構が建立され、日帝時代の帝国大学と専門大学が綜合大学へと体制を変えて設立され、これらの大学の大部分に哲学科が設置された。京城帝国大学から校名を変えたソウル大学校と高麗大学校、延世大学校、そして一九五〇年、朝鮮戦争を前後して釜山大学校、慶北大学校、全南大学校、忠南大学校などに、みな哲学科が設置された。これらの大学では哲学を教養必修として教え、西洋哲学という学問が広く普及し、認知されるようになった。朝鮮戦争の過程で、多くの知識人たちが北に拉致されたり、自ら進んで北に赴いたが、ここには哲学者たちも多数含まれていた。しかし一九五三年、休戦協定が調印されると、地方に避難していた主要大学がソウルに戻り、戦禍の復旧に乗り出した。戦後の哲学界の再建は、一九五三年の休戦直後、韓国哲学会が正式に発足してからである。韓国哲学会は一〇月一日、ソウル大で創立総会を開き、初代会長として高亨坤を選出し、一九三六年に日帝の弾圧により強制的に廃刊されていた『哲学』を一九五五年に機関誌として復刊した。

四 「復興の時期」(一九六〇—一九六九)

解放以後に設立された国内各大学の哲学科から若い哲学徒たちを継続して輩出した結果、一九六〇年代に入ると彼らが大学の講壇に立ち始めた。特に一九五〇年代の後半に海外留学をして帰国した学者たちが、一九六〇年代の初めに一線の各大学の

哲学科に教授として就任していった。それだけ韓国の哲学界は、若く活力的に変貌し、世代交替をなすに至った。このような世代交替とあわせて一九六〇年代、韓国の哲学界を活性化させた要因は、哲学会の複数化である。一九五〇年代までは「韓国哲学会」一つだけがあったが、ソウル大哲学科出身の研究者たちは、一九六三年に独自の哲学会として「哲学研究会」を発足させることにより、哲学界内に初めて複数の学会の時代を開いた。これに対応して一九六三年一月には慶北大学校哲学科・河岐洛教授が主となり、ソウルを除いた全国の哲学研究者たちが参加する哲学会として「韓国カント学会」を創立した。このような一連の哲学会の複数化過程は、哲学研究の活性化と全国化、そして学会の特性化という肯定的な効果をもたらした。このように学会が複数に増えるにつれて学術発表も急増し、一九四六年から一九五九年まで発刊された西洋哲学関連の論著の数に比べて、一九六〇年代に発刊された論著の数が六倍に至るほど増加した。⁽⁶⁾とここで、このように論文の本数が大きく増加したが、その内容においては、余りにもドイツ哲学―主としてドイツ観念論とマルクス主義哲学と実存哲学―一辺倒というのが当時まで、韓国で西洋哲学研究の特徴をなす。一九三一年から一九六八年まで韓国で発表された哲学者別の研究論文三九四本の中、カント研究が五一本、ヘーゲル研究が四五本、ハイデガー研究が三九本と、断然ドイツ哲学が圧倒的であった。

五 「試練の時期」(一九七〇―一九七九)

たとえドイツ哲学中心に学術活動が進んでいたといっても、一九六〇年代は復興の時期であり、各大学における世代交替と複数学会の出現により、西洋哲学の研究が活性化された時であった。しかし、政治独裁が加速化しながら、西洋哲学は国民倫理へ変質されるなど、逸脱を経た一種の試練の時期を迎える。一九六一年五月一六日の軍事革命は、官僚的権威主義を通して、わずか一〇年の間に産業化としての近代化に一定部分、成功を収めた。軍事政権の正当性確保のための急先務であった経済開発がある程度、成果をもたらすと、政治体制の正当性のための理論化に寄与し、国民的な統合感の造成のための輿論の主導を担当する勢力が必要となった。第三共和国の軍事政権が国民情緒の統合のため知識エリートたちに協力を要請した時、これに符応した代表的な人物が朴鍾鴻である。彼が草案を作成した「国民教育憲章」は、一九六八年一二月に制定、頒布され、韓国教育の指針として作用し、国民全員に暗誦が強要された。「国民教育憲章」は、国民たちに民族中興の歴史的使命感を強調するためのものであったが、能率と実質とを尊びながら、国家建設に寄与しようというのが主要な内容である。これは個人の自由と権利の伸張に対しては一言も言及しないままで、国家主義と全体主義と経済第一主義だけを一方的に宣言するものであった。

哲学者たちの協力で「国民教育憲章」を頒布した当時の政府は、政権の正当化のための理論化の作業と、国民的な統合感の造成のための与論化の作業に拍車をかけた。そして政府は、一九七〇年二学期から専門大学を含む全国のすべての大学で「国民倫理」を必須科目として教えるようにし、政府施行のすべての国家試験にも「国民倫理」が必須科目として指定されるようにし、このための研究と教育とを専門的に担当する学者たちが集まり、一九七三年に国民倫理学会が結成されるようになった。ついに一九七二年一〇月、維新憲法が公布されるや、軍事政権は長期執権のための制度化を断行し、一九七四年には「国民倫理」を高等学校の教科目に指定して、維新の理念の教育をより強化し、一九七七年、ソウル大学大学院には国民倫理教育学科が登場するようになり、その後、全国各地の大学で国民倫理学科が設置された。

六 「多元化の時期」(一九八〇—一九八九)

政権の正当性を合理化するため、哲学が国民倫理化する試練の時期を送ったのが一九七〇年代であったが、一九八〇年代にも軍部独裁は続いた。一九七九年一月二日、クーデターで政権を掌握した軍事政権は、一九八七年六月、民衆抗争の結果、大統領の直接選挙制という憲法改正がなされる時まで続いた。しかし、軍事独裁が長期化するにしがたい、政治制度の民主的改革を望む国民たちの念願は大きくなり、産業化での一定部分

の成功は自然に民主化に対する要求へと増幅していった。西欧的な近代化が、産業革命を通じた産業化と市民革命を通じた民主化へ形成されたように、韓国でも産業化の成功は、いまや民主化に対する熱望を伴うようになったのである。本来、民主化が多様な価値の共存を指向するように、民主化の熱望は様々な学問分野に対する多様な関心を招来し、国民倫理が哲学界を支配する現状は、逆にこれに対する反動として、国家と社会を多様な視覚で批判する社会哲学が、より多くの注目を浴びるようになった。そして一九八〇年代、韓国の哲学界は、学問的な多元化の時期を迎えるようになる。一九八〇年代初め、権威主義の政府は教育改革という措置を通して多くの大学を綜合大学校へと昇格させたが、これにより哲学科がほとんどすべての綜合大学校に設置され、あわせて教養哲学講座が大幅に増加することにより、大学生たちの民主主義の意識化の欲求に、逆説的であるが独裁政権が応えていくことになった。哲学教育のこのような拡散は、自由、民主、平等、正義、権利、人権、革命、解放など、西欧的な社会思想の核心的な価値を、学生たちの意識に深く根付かせた。社会的現象に対するこのような批判的関心の増大は、ただ学生たちだけでなく、学者たちにも影響を及ぼすようになったが、一九八〇年代の哲学者たちは、社会哲学を始め政治哲学、歴史哲学、社会倫理学など、実践的分野へ、研究の地平を拡大した。特にマルクーゼ、アドルノ、ハーバーマスなどのフランクフルト学派の批判理論が研究され、経済成長

にしたがって、分配の問題が重要な争点となりながら、ロールズの社会正義論が議論された。そして、朝鮮戦争以後、タブー視されていたマルクス主義に対する研究が、直接的なものではなかったが、ヘーゲルという迂廻路を経て進められてもいた。既存のドイツ哲学中心の研究を進めてきた韓国の哲学界に社会学と社会正義論に対する研究が加えられるにつれ、ドイツ哲学の研究も、ドイツ観念論と実存哲学中心を脱して現象学と解釈学などへ拡大した。このように哲学研究分野の多様化は、ドイツ哲学だけでなく、英米哲学の方面にも現れたが、分析哲学や科学哲学とあわせてイギリス経験論も本格的に研究された。さらに西洋哲学の基礎である古代ギリシア哲学に対する研究も、古典語に立脚して体系的に研究され始めた。

七 「分散の時期」(一九九〇—現在)

一九八七年、民衆抗争の勝利により大統領直接選挙制の憲法改正が達成されるなど、民主化運動もその実を結び、経済的にも安定し、一九八八年に開催されたオリンピックの成功は韓国を世界にひろく認知させるようになった。産業化と民主化とを同時に達成したという自信は、韓国人たちに、いまや世界性を目向けさせ、その中で自分たちの位相を新たに位置づけさせるように作用した。まず自己の位相に対する省察は、哲学的には韓国哲学の摸索として現れた。これは西洋哲学の受容過程に対して批判を行いながら、韓国の主体的、自生的な哲学を摸索

しようという試みとしてなされた。このために哲学研究会では「東西哲学の受容と韓国哲学の定立」(一九九七)、韓国哲学会では「哲学史と哲学・韓国哲学のパラダイム形成のために」(一九九八)、「韓国現代哲学一〇〇年の争点と課題」(一九九九)という主題で学術大会を開催し、数冊の単行本が出版された。しかし、これらは過度な自己意識と自己反省とを示しただけで、世界哲学史に寄与する主体的な韓国哲学の姿を具体的に提示したものはなかった。

しかし、何よりも世界性に対する最大の関心は、当代の世界的な話頭であったポスト・モダニズム論争に参加することとして現れた。西欧的なものに対する批判的反省が進められていた当時、韓国哲学界の雰囲気とも符合しながら、ポスト・モダン論争は西欧の近代性や合理性に対する議論に繋がりが、フーコー、デリダ、ラカンなどのフランス哲学者たちが相当数、紹介され研究された。しかし、二〇〇〇年代初め以降、このような関心は急速度に萎んでいくが、このような一過性は、ポスト・モダニズムに対する議論が西欧的なものに対する深い問題意識を持った反省を通し東洋的伝統を再検討する作業であるというよりは、また一つの西洋思想の後追いにとどまったという印象を与えるに十分なものであった。しかし、近代性(modernity)と脱近代性(postmodernity)との対立的なコードが、同一化／差異化、中心化／脱中心化、単一化／多様化、総体化／破片化、巨大化／微視化、集積化／分散化などと表現されるように、

ポスト・モダン・テイ論争を経ながら、韓国の哲学界は巨大な議論よりは、多様な分野に分散化しながら、それぞれ躍進する姿をとるようになった。そして一九八〇年代後半に、すでに多元化の様相を見せていた様々な分野、すなわちドイツ哲学内ではドイツ観念論に加えて現象学と解釈学が、英米哲学内ではイギリス経験論に加えて分析哲学と科学哲学と心理哲学が、フランス哲学内では構造主義とポスト構造主義が、そして古代ギリシア哲学と倫理学と社会哲学などの各自の垣根の中で発展の道を摸索した。

このように哲学の研究分野は、多元化された分散の形態としての発展を図っていたが、哲学の教育がなされる一線の大学の現場は徐々に状況が悪化して行った。一九九〇年代初めの生産圏の崩壊以後、米国主導のグローバル化が進展するに伴い、新自由主義が登場し、市場競争と効率性とが重視され、教育も古典や人文学よりは、実用性のある学問と就業率などが強調され、いわゆる需要者中心の大学教育体制に入るようになった。⁽⁸⁾あわせて実用中心の職業観は国民たちにも浸透し、二〇一〇年の韓国ギャラップの調査によると、哲学が国家発展に寄与しているかを問う質問に、韓国国民の五七%が「寄与している」と答えた反面、自分の子女の哲学科専攻への支持度を問う質問には、韓国国民の一〇%だけが支援するという二重的な答弁を行っている。⁽⁹⁾そして、このような需要者中心の大学体制によって登場したのが学部制であるが、これは哲学など基礎学問の志願

の学生数を大幅に減らし、哲学科を始めとする人文学系統の学部の立地を大きく萎縮させた。そして、一部の地方大の哲学科は廃止され、ソウル有数の大学の哲学科でさえ枯死の危機に直面しながら、大学社会で哲学の学問活動が激しく揺らぐ副作用をもたらした。これにより、国の内外で哲学を専攻した博士学位保持者が数百人ずつ溜まっていき、専任教員になれずに非常勤講師を転々とし最少の生計費で生活するという現状である。

八 結言—韓国における西洋哲学の展開の特徴

以上の時期別の展開をよく見てみると、韓国における西洋哲学の教育と研究は次のような三つの特徴を持つといえる。第一に、韓国における西洋哲学は主体的に始まったが、自律的であることはできなかった。一八七〇年代、韓国で西洋哲学を最初に研究した学者である李定稷が、その論文「康氏哲学説大略」でライプニッツの合理論とヒュームの経験論とカントの理性哲学とを挙げて論じた時、彼はこれを性理学の本来之性を通し、徹底して儒学的に理解した。また、韓国で最初に西洋哲学に関連する著書を著した李寅梓が、一九一二年、その著書『古代ギリシア哲学攷辨』でプラトンの *Eros* 説を説明する時、彼はこれを性理学の理一分殊説の立場から批判した。そして一九〇九年、韓国最初に海外留学を行った金重世（ライプツィヒ大学）と、その後に出発した白性郁（ヴュルツブルク大学）と金法麟（パリ大学）などが、海外で直接、西洋哲学に触れた時、彼ら

は西洋哲学を仏教思想の土台の上で受容しようと努力した。このように、西洋哲学との最初の対面期に、韓国の哲学者たちは、西洋哲学を儒教と仏教という伝統思想の観点から、主体的に受容しようと、絶えず試みたのであった。しかし、その後、韓国に最初の大学教育機関である京城帝国大学が設立され、そこに哲学科を設置したのは、朝鮮人たちの民立大学の設立の試みを雲散させようとした朝鮮総督府であった。京城帝大哲学科出身者たちが、以後の韓国哲学界を主導したといっても、韓国における西洋哲学の教育と研究において日本の影響力は至大であったと見るほかはない。加えて一九四八年、大韓民国の建国以後、五個の総合大学に哲学科が設立され、一九八〇年代初、教育改革の措置により昇格された五〇余りの総合大学に哲学科が設置されたが、哲学科の教科課程を見ると、大多数が千篇一律的であり、西洋のどの大学のものかといってもよいほど個性がない^⑩。徹底して西洋哲学が中心であったり、東洋哲学が一部に並立されていただけで、西洋哲学と東洋哲学とを有機的に連繫し、思想を主体的、自律的に消化しようという講座は、全国的に極めて稀であるのが実情である。これは植民地と戦争と断絶を経ながら、日本と米国の影響力が増大するしかなかった他律的な歴史により、脱植民の課題が西欧化へと代替されたまま、脱西欧の自律的な意識はいまだに不足した韓国哲学界の現実をよく示す事例であるといえる。

韓国における西洋哲学の展開が持つ第二の特徴は、その哲学

において多様性はあるが、獨創性が不足しているという点である。植民地期の日本の影響、解放以後の左翼と右翼の理念対立、朝鮮戦争による死と廃墟の体験などの理由のせいで、ドイツ観念論とマルクス主義と実存哲学などのドイツ哲学が一九六〇年代末まで、韓国の哲学研究の主流を形成した。しかし民主化運動の成功により、様々な学問分野に対して多様な関心が増大することにより、社会哲学を始めとする政治哲学、歴史哲学、社会倫理学など、実践的分野での研究の地平が拡大し、ドイツ哲学の研究もドイツ観念論と実存哲学中心から脱し、現象学と解釈学など拡大していった。また英米哲学方面では、イギリス経験論と分析哲学と科学哲学などが、フランス哲学方面では、構造主義とポスト構造主義などが、そして西洋哲学の基礎としての古代ギリシア哲学が、多様に研究、教育された。このように韓国での西洋哲学は、過去のドイツ哲学中心という偏食から抜け出し、明らかに多元化は確保したが、果たしてそのような哲学の間で韓国特有の獨創的なものを探し出すことができるのかに対しては、相当、懐疑的にならざるをえない。時間と空間によって縦横に交錯する思惟の地形図の中から完全に獨創的な思想を発明するのは当初から不可能なことであるが、ここで「韓国特有の獨創的なもの」とは、韓国的な経験現実を普遍的な問題の解決へ拡大・昇華することをいう。例えば、産業化と民主化の同時達成という韓国的な経験を生かし、果たして資本主義と民主主義との結合が望ましいのか、あるいは東アジア式結合

のモデルが可能なのかを探索すること。南と北の分断という、韓国だけの現実を開発するためにも相互に衝突する見解の間で和静する方法論を開発すること。IT産業の発展という韓国的な経験を土台としてネットワーク社会の中で、人間の破片化と連繋化とを考へること。長い間、心を探索して来た韓国仏教の伝統を活用して、人間の心の解明において、哲学と心理学と認知科学の協同を摸索することなどが、それである。しかし惜しまれることには、このような問題意識に対する真摯な苦悶を見出しにくく、したがって現段階の韓国の哲学は、外来思想の受容が習合と変容とを経て独創性を発揮する段階にまでは至ることができないと見られる。

最後に、韓国での西洋哲学の展開が持つ第三の特徴は、その展開が個別深化的であるが、普遍拡大的ではなかったという点である。一九八〇年代末の民主化の成功以後、韓国では西洋哲学のほとんどすべての分野が研究され教育された。そして、研究の分野別に、研究の対象学者別に学会が組織運営された。分野別の学会としては、韓国現象学会、韓国解釈学会、韓国分析哲学会、韓国科学哲学会、韓国歴史哲学会、韓国倫理学会、韓国生命倫理学会、韓国環境哲学会、韓国哲学的人間学会、韓国論理学会などがあり、時代別としては韓国西洋古典哲学会、韓国中世哲学会、西洋近代哲学会などがあり、学者別としては、韓国カント学会、韓国ヘーゲル学会、韓国ニーチェ学会、韓国キルケゴール学会、韓国ホワイトヘッド学会、韓国ハイデガー

学会、韓国ヤスパース学会などがある。このように専門化した独立学会が持続的に誕生しながら、韓国における西洋哲学は、個別的な、分野別・時期別・人物別の研究については相当、深化した。しかし、このような西洋哲学の内的な多元化は、時間を経るにつれ、むしろ哲学陣営内に障壁化を招き、これにより個別分野の研究は深化したが、巨大な議論には目を背ける現象が現れた。人間の意識と認識と心理とを同じく主題としながらも、現象学と心理哲学と近代哲学とがともに議論を進行することは探すことが難しく、同じ主題について、西洋哲学同様の分野と唯識仏教や陽明心学などの東洋哲学とを連繋して探索するのは、余り歓迎されない試みとなっており、ましてや人間の心を西洋哲学と東洋哲学が心理学、脳科学、認知科学などと結合して協同研究することは、相当、距離が遠いこととなってしまう。実際、西洋哲学と東洋哲学だけをとってみても、感性と理性の関係、思惟と言語の関係、人間と自然の関係、個人と社会の関係などは、同じ場での論議が十分に可能であり、このような共同の議論が心理学、認知科学、生態学、社会学などに相応の波及効果を与えることができる。しかし、哲学においても東洋と西洋とがともに論議されていない状況で、そして哲学が自己の周辺の隣接学問でさえ連繋がうまくなされない実情で、東と西をあわせる全地球的な問題を哲学が周辺学問との学際的(interdisciplinary)論議を土台とした談論を主導していくのは、ほぼ不可能と見られる。産業化による生態系の危機、世界化の

中での文明間の衝突、資本主義の深化に伴う貧富の両極化、機械化、ネットワーク化社会の中で人間の本質と疎外などのグローバルな問題は、特定の学問の境界を超える超学問的(transdisciplinary)、かつ学際的な協同研究を必要とする。しかし、韓国における哲学は、このような研究方法の展開に相当、無気力であり、このような無力感は自然と人文学の危機、哲学の危機を呼び起こした。韓国における人文学の危機は、表面的には新自由主義的市場競争に追従する政府の就業率の強調政策に起因したもののようであるが、その裏面には普遍的でなければならぬ哲学が、余りに哲学的であることができずに自ら危機を招いたという点を指摘することができる。普遍的な思惟を本領とする哲学は、総体性を求めるグローバルな問題解決に鈍感でいられない役割を持っているのだ。地球という同じ空間で、人間という同じ種として生きているという点を共通の地盤とする以上、人間の思惟の蓄積物が人間の普遍の問題を解決するのに力をあわせないとすることは非人間的なこともない。それゆえ哲学が本来追究する普遍性が、学際性を通して、総体性を要する巨大な議論に積極的に参加する時に至ってこそ、今日の韓国における哲学の危機は、克服の端緒を探すことができるであろう。

(翻訳担当・佐藤厚(専修大学特任教授))

- (1) 朴鍾鴻「西欧思想の導入 批判と摂取」(『亞細亞研究』35、一九六九年)三三頁。
- (2) 崔東熙「慎後聃の西学辯に対する研究」(『亞細亞研究』46、一九七二年)一一二七頁。
- (3) 申龜玄「西洋哲学の伝来と受容」(『韓国文化思想大系』第二巻、大邱・嶺南大民族文化研究所、二〇〇〇年)四六一頁。
- (4) 李光来「韓国の西洋思想受容史」(ソウル・ヨルリンチェクドゥル、二〇〇三年)二二、四頁。
- (5) 李基相「西洋哲学の受容と韓国哲学の摸索」(ソウル・知識産業社、二〇〇二年)三九頁。
- (6) ソウル大学校哲学思想研究所編『哲学思想』(八号、一九九八年)一一三頁。
- (7) 沈在龍編『韓国で哲学する姿勢』(ソウル・集文堂、一九八六年)、白宗鉉『ドイツ哲学と二〇世紀韓国の哲学』(ソウル・哲学と現実社、一九九八年)、姜英安『我々にとって哲学は何であるか…近代、理性、主体を中心として見た現代韓国哲学史』(ソウル・窮理、二〇〇二年)、金載賢『韓国社会哲学の受容と展開』(ソウル・トンニョク、二〇〇二年)。
- (8) 南景熙「韓国現代哲学の方向定位と新たな言語観」(梨花女大韓国文化研究院編『哲学研究五〇年』ソウル・慧眼、二〇〇三年)三二頁。
- (9) 韓国ギャラップ調査研究所『韓国人の哲学』(ソウル・韓国ギャラップ、二〇一一年)四二―四五頁。
- (10) 李光来「韓国の西洋思想受容史」(ソウル・ヨルリンチェクドゥル、二〇〇三年)四〇四頁。

(きむ・じょんうく、仏教生態学・東西比較哲学、
東国大学校仏教学術院院長)